

腐敗の聖域

無垢なる聖者と謀略の教皇



目次

○執務室の密事【背面座位/体格差/視姦/フェラ】	
※途中まで.....	3
■二つの至宝と二人の主.....	13

※サンプル版です。

■性描写なし / ●挿入あり / ○挿入なし

○執務室の密事【背面座位/体格差/視姦/フェラ】※途中まで

神殿事務を統括する事務総長アルベリックは、手に持った重要書類を握り締めながら、教皇執務室の前に立っていた。

重厚な意匠が施された扉に、控えめなノックの音が三回響いた。

「入ってよいですよ、アルベリック」

室内から教皇シルヴェルの穏やかで威厳に満ちた声が届く。

アルベリックは「失礼いたします」と静かに扉を開き、

一歩足を踏み入れその場で凍りついた。

じゅぽっ…！じゅぽっ…！♡じゅぶじゅぶじゅぶ♡

ちゅぱ……っ♡ぐちゅっ、れろお……っ♡

「んっ……ン………は……ふうっ♡」

部屋の奥、巨大な木製デスクの陰から、明らかに執務中には不似合いな淫水音と、喉を鳴らすような甘い吐息が漏れ聞こえていたのだ。

くちゅ、くちゅ……っ♡ぐちゅっ、ちゅぶ……っ♡

足元を覆うデスクの重厚な幕板に遮られ、その下の詳しい様子はアルベリックの立ち位置からは見えない。

しかし、見えないからこそ、耳から侵入してくる音が生々しい想像となって脳内を埋め尽くしていく。

シルヴェルの足元に跪いているのは、異世界から降臨した

せいこ はすみあや

『聖子』蓮見彩 であるはずだ。

本来、聖子とは高貴な血と交わり、優れた仔を残すための至宝。

しかし二人の聖子が同時に降臨したという歴史上あり得ぬ奇跡は、神殿にとってまさに天命だった。

教皇自らが聖子を導き、その聖導力を開花させる。

即ち、教皇の一物で蜜壺を繰り返し貫き、歓喜に狂う肉体へと開発していくこと。

そうして快樂の虜となった聖子が、自ら教皇の種を欲し、その子を宿すことを切望するよう仕向けることこそが、この導きの最終目的であった。

それこそが神殿の威光を揺るぎないものとし、女神の祝福を証明する至高の神事なのだ。

だが、執務室の静寂を切り裂くあまりに下品な音の暴力に、アルベリックの理性が激しく揺さぶられる。

（不敬だ……！聖子様の声と淫音に、このような……っ！）

姿は見えなくても、鼓膜を直接揺さぶる淫音だけで、アルベリックの法衣の下に隠れた根元は瞬く間にパンパンに跳ね起き、熱く脈打ち始めていた。

「も、申し訳ございません……っ！お取込み中とは知らず、出直してまいります……っ！」

アルベリックは顔を赤く染め、慌てて回れ右をして辞去しようとした。

しかし、シルヴェルは優しく引き留めるように手を上げる。

「何を恥じる必要があるのです、アルベリック、聖子様の神聖
よ よう
なる与養の現場に立ち会えたのです。むしろその滾りこそが、
けいけん
女神様への敬虔な奉納なのですよ」

「は、ははっ……！ありがたき幸せにございます……っ！」
恐縮しながら教皇の前に進み出たアルベリックは、手元の報告書に目を落とそうと試みる。

しかし、耳に届くのは目を疑うほど濃厚な性音ばかりだった。

じゅぼっ……！じゅぼっ……！じゅぼっ……！♡

「くちゅ……っ♡んぐっ、ちゅる、れろお……っ♡」

「ふふっ、美味しいですか？」

「ンっ、じゅっ……るっ……おいひいっ♡ンうっ……♡」

「おやおや、自ら慰めになって……切なくなってしまうましたか♡」

ちゅくちゅくっ♡ぬちっ、ぬちっ……♡ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅっ……♡♡

ズチュル、じゅぶっ……♡ぐちゅり、ぐちゅり……っ♡♡

「ンぐあっ……♡あゝ、ほしいっ……っ♡きよおこおさまのっ、おちんぽっ、ほしくてえっ……！♡おまんこ、ぐちゅぐちゅでっ……せつないのおツ……♡♡あゝ、あゝ ああっ……♡」

シルヴェルの優しくも愉しげな声に続いて耳に飛び込んできたのは、あまりに艶っぽい吐息と、蜜孔を搔き回す下品な水音だった。

その度に彩の声代わりしたばかりであろううら若き少年の声帯が切なげな音を奏でるのだ。

（な、なんだこの音は……っ！聖子様が、教皇様の御根を貪りながら、自ら指を突き立てておられるというのか……！？）

視線を上げずとも、鼓膜を直接揺さぶる淫らな音だけで、アルベリックの脳裏に淫猥な光景が鮮明に浮かび上がる。

アルベリックの法衣の下では、自らの愚根が瞬く間にパンパンに跳ね起き、激しく脈打ち始めてしまった。

「……くっ！？もっ、申し訳ございません……っ！！」

股間の猛烈な主張に気づいたアルベリックは、恥痛のあまり顔を歪め、股間を両手で抑えてその場に膝をついた。

「聖子様の……聖子様のお姿と淫音が、あまりに神々しく……！私のような卑しい身でありながら、不敬にもこのように反応してしまい……っ！どのような処罰もお受けいたします……っ！」

深々と床に額を擦り付ける部下に対し、シルヴェルは怒るどころか、愛おしそうに彩の頭を撫でながらフッと優しく微笑んだ。

「顔を上げなさい、アルベリック、責めるつもりなどありませんよ。むしろ自らの幸運を噛み締めなさい」

「は、幸運……でございますか？」

「ええ。聖子様が神聖なる快樂に目覚め、聖導力を高めていく至高の過程……その一端を目の当たりにできたのですから。信徒としてこれ以上の祝福はないでしょう」

「あ……あ……っ！ありがたき、お言葉……っ！」

教皇シルヴェルの肯定にアルベリックが感涙に咽ぶ中、

シルヴェルの男根を口から吐き出した彩が、ダラリと白濁液とよだれの混ざり合った粘液を垂らしながら、デスクの上にぬるりと這い上がってきた。

「教皇様あ……っ♡お口だけじゃ、足りないよお……っ♡」

彩は自らシルヴェルに向かい合う形でその首にしがみつくと、トロトロに濡れた自らの蜜孔を、教皇の天を突く亀頭の先端へぬちっぬちっ♡と誘うように擦りつけ、蕩けた腫で強請った。

「ふふ、彩様、そんなに私のものが欲しいのですか？」

シルヴェルは透かし絹の法衣越しに、彩の真っ赤に熟しきった突起を指先でコリコリと挟んで弄んだ。

「あッっ……♡ほしいれす……っ♡教皇様のおっきいおちんぽっ、僕のおまんこに入れて……っ♡早く種付けしてください……っ♡」

胸元への刺激にビクッ！と身を震わせながら、彩は快楽の声を漏らし、さらに蜜孔を教皇の男根へと擦りつけて乞う。

シルヴェルは彩の頬を撫でると、冷や汗を流しながら床に平伏するアルベリックへと視線を向けた。

「彩様、……勤勉に従順な私の部下に彩様の美しいお姿を目にする幸運を与えていただけますか？」

「んっ……♡ふふ、いいよ……っ♡アルベリックにも、僕がいっぱい気持ちよくなってるよ、見せてあげる……♡」

「近くへ来なさい、アルベリック。目の前で確と目撃するのです」

「は、ははっ……！」

アルベリックは膝をついたままデスクの脇へと歩み寄り、胸の前で手を組んで神に祈る体勢をとった。

シルヴェルは彩の身体をぐると反転させ、背中から抱きすくめるようにして己の膝の上に座らせ、その太ももを広げて前方へと突き出した。

これにより、膝立ちのアルベリックのちょうど目線の高さに、彩の股間が差し出される形となる。

「あ……あぁ……っ！聖子様……っ！？」

アルベリックの至近距離に晒されたのは、息を呑むほどに可憐で、そしてあまりに淫らな聖子の姿であった。

艶やかな黒髪と、潤んだ黒目。どこか幼さの残る柔らかそうな頬は、下半身の疼きと絶頂への期待から切なそうに朱に染まっている。

異世界から召喚されたというその顔立ちは無垢で美しく、神殿の聖者たる気品に満ちていた。

しかし、その可憐な顔立ちとは裏腹に、下半身はあまりにも艶
いんび
めかしく、淫靡に乱れていた。

肌を隠すためのものとは思えない極小の白い絹布と、その上に羽織った極薄の透かし絹の法衣の隙間から、トロトロに愛液を滴らせ濡れ光る割れ目と、一度開拓し尽くされてひくひくと淫らに蠢く雌孔が、アルベリックの目の前で丸見えになっていた。

「さあ、受け入れなさい」

そう耳元で囁かれ、「はあ、はあっ……♡」と彩の小さく可憐な唇からは興奮に満ちた熱い吐息がこぼれる。

蕩けた腫でシルヴェルと合体する瞬間を一秒でも逃すまいと、その太く怒張した巨根をじっと見つめる。

シルヴェルが彩の太ももの裏を両手でグッと抱え上げ、亀頭の先を後ろから彩の蜜孔へと押し当てた。

【中略/続きは製品版をお楽しみください】

※製品版に挿入描写あります。

■二つの至宝と二人の主

キャンバスに筆を滑らせる。

香ばしくもツンと鼻を突くアマニ油と溶剤の重い匂いが氣道を満たす。

色が重なり、層を成し、美術室に筆を重ねる音だけが響いていた。

同じ部活の仲間たちは、『ちょっと前』に挨拶をして帰っていったはずだ。

けれど、絵に没頭していると、そのちょっと前が数分前なのか数時間前なのかすら定かではない。

「彩、まだ居たのか？そろそろ学校閉まるぞ」

つるぎがく

ふいにガラリと美術室の引き戸が開き、友人の鶴城学が顔を出した。

「えっ、もう？そんな時間……？」

パッと顔を上げ時計を見やる。

柔らかく跳ねた黒髪の間隙から覗く耳朶は、作業に集中していたせいかほんのり赤みを帯びていた。

黒目がちで背幅は学年でも平均程だが、同年代の男子と比べてもどこか幼げな印象を与える。

対する学は、彩とは対照的だった。

すっきりと通った鼻筋に、知性を感じさせる涼しげで切れのある目元。

整った顔立ちとすんなり伸びた高い背丈は、ただ立っているだけでも人目を引く存在感がある。

どこかぼんやりとしていて浮世離れした彩を甲斐甲斐しく世話を焼いては引っ張ってくれる。高校生らしからず冷静で、頼りになる友人だ。

ふと時計から窓の外へと視線を移すと、大きな窓の向こうには夕景が広がっていた。

西の空から落ちる斜光が、西日の差し込む美術室をドロリとした濃密な朱色で染め上げている。

キャンバスの上に真紅の絵の具をぶちまけて無理やり塗り潰したかのような、重苦しく狂おしい赤。

あまりの色彩の重さに、彩は大きな目を細める。

「……赤い」

「赤い？なんの話だ」

「空が赤いよ」

「そうか？こんなもんだろ。それよりも早く帰るぞ」

彩は言葉を呑み込み、慌てて筆を洗油につけて帰り支度を始めた。

絵の具の匂いが染みついたエプロンを脱ぎ、小さく畳んで自分のロッカーに押し込む。

筆洗用の油のフタを閉め、木製のイーゼルにかけたキャンバスにそっと布を被せると、彩はスケッチブックとカバンを抱えて学の元へ駆け寄った。

「ごめんね学、待たせちゃって」

「別にいいよ。お前が一度筆を握ると周りが見えなくなるのは、いつものことだろ」

呆れたように言いながらも、学は彩の歩幅に合わせてゆっくりと歩き出す。

ガラガラと引き戸を閉め、鍵を返して静まり返った昇降口を出ると、校庭は先ほど窓から見たときよりも一層、濃密な朱に染まっていた。

「やっぱり……今日の空、変だよ」

「……まだそんなことを言ってんのか。ただの夕焼けだろ」

学はそう一蹴しながらも、彩の言葉に引っかかったのか、一瞬だけ足を止めて空を見上げた。

影の落ち方、光の角度。彩の目には、世界の色彩そのものが不自然に歪み、塗り潰されていくように見えていた。

「普通の夕焼けと変わらないだろ。……彩？」

学が怪訝そうに振り返った、その瞬間だった。

影が、足元から消えた。静寂のあと、赤がぐにゃりと歪み、重い湿気と古びた煉瓦の匂いが、夕焼けの空をまるごと塗り潰していく。

視界が歪み、浮遊感と強烈な眩暈が二人を襲った。

「彩っ！」

咄嗟に学が伸ばした手が、彩の腕を強く引き寄せる。

次の瞬間、重苦しい湿気と、幾重もの線香が焦げ付いたような香の匂いが、気道になだれ込んできた。

彩が目を開けると、そこは慣れ親しんだ通学路などではなく、日本のどこを探しても存在するはずのない、レンガ造りの薄暗いドーム状の空間だった。

二人が倒れ込んでいる大理石の床には、複雑で緻密な溝が刻まれ、そこを銀色の液体が発光しながら脈打つように流れている。

その周りをぐるりと取り囲むのは、深いフードを目深にかぶった無数の僧侶たちだ。

低くうねるような重低音の唱文が、地下の静寂を揺らしている。

さらにその外郭には、フルプレートのアーマーに身を包んだ厳めしい騎士たちが壁際にズラリと居並んでいた。

（なに、ここ……映画の撮影……？）

あまりの非現実感に彩の思考が凍りつく中、目の前にずっと人影が立った。

二人を取り囲む異彩の陣の中心。儀式の要としてそこに鎮座していたのは、銀色の精巧な錫杖を手にした一人の男だった。

薄灰色の髪に、銀縁の片眼鏡、胸元に複雑な紋章を刻んだ漆黑と銀の法衣を纏っている。

見上げる程の長身だが線は細い。

二十代半ばほどに見える繊細で儚げな顔立ちには、慈愛に満ちた柔らかな笑みが浮かべられていた。

だが、片眼鏡の奥にある琥珀色の瞳は、二人を検分しているようにも見える。

男が静かに錫杖の底で床を叩くと、頭上の環がジャラリと鳴り、地鳴りのような唱文がぴたりと止んだ。

「静粛にせよ！」

頭上から響き渡ったのは、朗々とした、それでいて威圧感を孕む若い男の声だった。

彩が顔を上げると、視線の先には眩いばかりの金髪をなびかせた青年が立っていた。

深く澄んだ青い瞳は美しいが、そこに宿る光は傲慢で、眼下に立つ自分たちを品定めするように見下している。

彫りの深い整った顔立ちに、仕立ての良い豪華な衣装を纏った姿は、一見すれば絵画から抜け出してきた王子そのものだ。

だが、その唇の端に浮かぶ薄っすらとした笑みには、計算高さと思しき欲望が透けて見えた。

（ウィッグ……じゃない。あんな自然な光沢、染料じゃ出せない）

彩の美術部員としての目が、無意識に周囲の異様さを捉えていく。

周囲を取り囲む者たちは、長身の学すら小さく見えるほど体格が良い。

何より、見渡す限り日本人離れした骨格と、現実の人間ではあり得ない色彩の髪がひしめいていた。

（それに、あの『衣装』の質感……）

目の前にある鎧の鈍い金属光沢、法衣の重厚な織り。どれも映画の小道具やコスプレの域を遥かに超えている。

色彩の鮮やかさも、布地の色のくすみや落ち感も、すべてが本物としてそこに存在していた。

「異世界の者どもよ、ようこそ我が国へ」

尊大な男が満足げに腕を広げ、声高らかに言葉を紡ぐ。

その言葉の節々に滲む熱量に、彩はハッと息を呑み、思考を現実へと引き戻した。

「異世界の扉が開き、まさか二体もの至宝がこの国に降臨されるとは……！よくぞ来てくれた、我が愛しき客人たちよ。歓迎しよう、我がグラディス王国へ！」

2人とも顔を見合わせる。先ず明らかに居住地の異なる相手と会話に通じていることに疑問を抱くが、それよりも彼が彩と学二人に向けて放った言葉に友人の学が一瞬思案した後に一歩前に出て問いかけた。

「客人というのはどういうことですか？」

この尊大な青年の言葉からして彼等が、彩と学を呼び出したとでも言うような口ぶりだ。

数秒前に通学路にいた筈だ。アスファルトの道が、煉瓦作りの湿気の籠った据えたような空間に瞬間移動したような。

明らかに現実離れした事象に困惑するしかないというのに、流石、友人の学はこんな状況でも非常に冷静にそして怯むことなく直球で疑問を投げかける。

「威勢が良いな。だが、我が国への礼節を欠く問い方だが。……まあいい、無知な異世界の客人だ、礼節を知らぬ非礼は特別に免じてやろう」

尊大な青年はふっと唇の端を上げ、さも滑稽だと言わんばかりに鼻で笑う。

そして胸に手を当て、堂々と自らの名を口にした。

「私はこのグラディス王国が第二王子、アルフレッド・グラディスだ。お前たち二人は、我が国の存亡と繁栄のために古の法を用いて喚び出された『聖子』……つまり、選ばれし客人なのだよ」

（王子……？せいこ……？）

異次元すぎる単語の羅列に、思考が追いつかない。

だが、学は眉ひとつ動かさず、冷やかな瞳でその自称王子を見据えていた。

「……なるほど。つまり、俺たちの意向を無視した『不当な拉致』だと言いたいわけですね。俺たちには元の生活がある。今すぐ戻してください、アルフレッド殿下」

「返せるわけがなかろう。これは女神の意志なのだからな」

悪びれもせず言い放つアルフレッドの態度に、学がさらに抗議の言葉を重ねようとした、その時だった。

「そこまでにされてはいかがでしょう、王子殿下」

男が足を踏み出すと、周囲の神殿騎士や法衣の者たちが一斉に頭を下げ、深く平伏した。

第二王子アルフレッドすらも、わずかに忌々しそうに眉をひそめて追従の姿勢を見せる。

「……教皇殿」

アルフレッドの口から漏れたその言葉に、彩は息を飲んだ。

（教皇……？この人が、この国の……宗教の……一番偉い人……？）

彩と学が召喚された際に陣の中心に居た人物だ。

男はどこまでも穏やかな微笑みをたたえたまま、胸元の紋章に手を当てて静かに頭を下げた。

「お初にお目にかかります。シルヴェル・エストラドと申します」

教皇シルヴェルと名乗ったその男は、片眼鏡の奥にある董色の瞳を細め、二人に向かって深く頭を下げてみせた。

「まずは、お二人をこのような形で我が国へと引き込んでしまいましたこと、神殿を預かる者として心よりお詫び申し上げます」

「……えっ」

思わず彩の口から驚きの声が漏れる。周囲の重々しい甲冑の騎士たち、そしてあの尊大な第二王子までもが当然のような顔をしている中で、彼だけが、自分たちに明確な謝罪を口にしたからだ。

学も一瞬だけ目を見開いたが、すぐに警戒を解かず、教皇の挙動を見つめている。

「事の成り行きを説明いたしましょう。お二人をお喚びしたのは、王家の命のもと執り行われた国家規模の神事……当神殿が主導の救世主召喚の儀でございます。我がグラディス王国は今、歴史上最大の危機に直面しており、神の宣託に従ってお二人という救世主様を女神の導きで異世界よりお迎えしたのです」

「……救世主、ですか」

学が低く呟く。シルヴェルは痛ましそうに眉をひそめ、薄い唇から免罪を乞うように言葉を紡いだ。

「ご自身の生活があったでしょうに、勝手な事情でお連れした非は、どのような言葉を尽くしても贖えません。……しかしながら、非常に申し上げにくいのですが」

シルヴェルは一度言葉を切り、逃れようのない現実を二人へ突きつけた。

「現在のところ、お二人を元の世界へお戻しする術は……この国のいかなる法術をもってしても、不可能なのです」

「っ……戻せない、って……どういふことですか!？」

それまで学の背中に隠れるようにしていた彩が、耐えかねて声を上げた。

遠く離れてしまった家族の温もりや、友人たちの顔、そして美術室に残してきた描きかけのキャンバスが脳裏をよぎる。

それら全てから突如切り離されたのだという恐ろしい事実が、遅れて巨大な波のように押し寄せてきた。

「そんな……っ」

呆然と立ち尽くす彩の横で、常に冷静だった学の顔にも、初めて明確な動揺と困惑の色が走った。

激昂することすらできず、意気消沈して勢いを削がれた二人の様子を察したアルフレッドは、すかさずその隙に話に割り込んできた。

「私たちは決してお前たちを害しようなどとは思っていない。
……戻せと言ったところで、今はどうにもならぬ。ここで互いに感情をぶつけ合っても堂々巡りだ。まずは部屋を用意させる。身を清め、温かい食事を取り、ゆっくり体を休めるといい。積もる話は明日、落ち着いてからにしよう」

アルフレッドのその言葉に、学は視線を落とし、切れ長の目をさらに鋭く細めた。

この状況で戻せと抗議し続けたところで、目の前にいるのは圧倒的な権力を持つ王族だ。

周囲を固める無数の騎士たち、完璧なアウェイの状況下でこれ以上愚直に反発し、相手の警戒感を煽るのは愚策でしかない。

「……分かりました。お言葉に甘えて、今日のところはお世話になります」

学は深く溜息を吐き出すと渋々頷き、納得しきれていない顔の彩の袖を軽く引いた。

今は下手に刺激せず、状況を整理する時間が必要だと、そう判断しての同意なのだろう。

「物分かりが良くて助かる。二人を貴賓室へ案内しろ」

アルフレッドが軽く手を振ると、召使いたちが恭しく頭を下げ、二人を大広間から促し始める。

すれ違いざま、静かに佇んでいた教皇シルヴェルと目が合った。片眼鏡の奥の董色の瞳を細め、優しい笑みを深めた。

彩はその視線にどこか奇妙な感覚を覚えながら、学の隣を歩いて部屋へと向かうのだった。



案内されたのは、神殿の広大な敷地内にある貴賓館の一室で、まるで小さな宮殿のようだった。

足が沈み込むほど分厚い絨毯、天井から吊り下げられたシャンデリア、そして二人でも持て余すような天蓋付きのキングサイズのベッド。調度品のひとつひとつに細やかな金糸や彫刻が施されている。

部屋に入るとすぐに、胸元に小さな徽章 をつけた給仕長と思しき男が、恭しく一礼を捧げて進み出てきた。後ろに控える侍従が手にした銀の盆には、上質なシルクで仕立てられた肌触りの良さそうな衣類が綺麗に畳まれている。

「聖子様方。お長旅でお疲れのこととお察しいたします。まずはこちらのお召し物にお着替えになられてはいかがでしょうか。お手伝いの者を待機させております」

申し分ないほど丁寧な所作だが、学は身構えたまま動かない。

用意された豪華な椅子に深く腰掛け、腕を組んだまま、冷やかな視線で給仕長を見据えた。

「必要ない」

学の短く不躰な拒絶が、静かな室内を打った。

「俺たちは着替えるつもりはない。下がってくれ」

相手が用意した服に袖を通すことは、そのまま相手のルールを呑み、この場に従属することを認めるに等しい、それを察知した学の徹底した拒絶に、給仕長は一瞬だけ表情を強張らせた。だが、すぐに完璧な笑みを貼り直して深々と頭を下げた。

「……失礼いたしました。では、お食事の準備を整えさせます」

給仕長が合図を送ると、重々しい扉が再び開き、車輪を滑らせて豪華なワゴンが運ばれてきた。

銀の蓋が外されると、テーブルの上に所狭しと並べられたのは、香ばしい肉料理や色鮮やかな果実、湯気を立てるスープ。

高校生の二人には明らかに多すぎる、何人前ともつかないご馳走の山に、彩は気圧されるように息を呑む。

給仕たちの列の末席には、若い侍従が、銀の取り分け皿を手に控えていた。

給仕たちが恭しく一礼して下がっても、二人は一切の手を付けなかった。学は用意された豪華な椅子に深く腰掛け、腕を組んだまま、冷ややかな視線で料理を見つめている。

「……食べるなよ、彩。何が仕込まれているか分からない」

「うん……」

あからさまな警戒感を露わにする二人に対し、給仕の長と思しき年配の男は、それすらも最初から計算済みであったかのように、洗練された穏やかな笑みを浮かべた。

「見知らぬ土地での食事に、ご警戒なさるのも当然でございます。当国では尊きお客様をおもてなしする際、当然の嗜みとして毒味を執り行わせていただいております」

給仕長が短く頷くと、控えていた侍従が澁みのない動作で一歩進み出た。

侍従は二人の目の前で銀皿に各料理を少しずつ盛り付けると、ためらいなくそれらを口へと運び、毒がないことを証明してみせた。一口一口を静かに飲み込み、何事もなかったかのようにずっと姿勢を正す。

「ご覧の通り、毒の類いは一切含まれておりません。我が王子殿下が大切なお客のためにご用意されたお食事でございます。どうか、温かいうちにお召し上がりください」

彩は喉の奥がぐっと詰まるような居心地の悪さを感じるのだった。

食事が安全だと証明され、緊張の糸がほんの少しだけ緩んだ隙に、張り詰めていた身体が急激な空腹を主張し始める。

放課後に異世界へ攫われてきたのだ。腹が減っているのは当たり前のことだった。

目の前で毒味まで見せられた以上、頑なに拒み続ける理由もない。

それに、これからどう行動するにしても、体力を失ってしまっ
ては逃げることもすら覚束なくなる。

二人は短く視線を交わした。学が微かに顎を引いて頷くのを確認すると、彩はおそろおそろ手を伸ばし、重厚な銀の匙を手
に取った。

匙を口に含むと、丁寧に裏ごしされたポタージュの滑らかな口
当たりが広がった。

じっくりと煮込まれた根菜の甘みと濃厚なミルクの風味が溶け
合い、じんわりと冷え切っていた胃腑を温めていく。

「美味しい……」

つい、声が漏れてしまった。

日本という食の豊かさに恵まれた環境で育ったこともあり、ど
こか味気ないものを想像していた異世界の食文化だったが、そ
の予想はあっさりと裏切られた。

ふと顔を上げると、先ほどまで厳格な面持ちだった給仕長が、どこか目元を緩めて微笑ましように彩を見つめていた。

その優しげな眼差しに気づいた彩は、自分の子供っぽい反応が恥ずかしくなり、照れくさそうに少し肩をすくめてうつむいた。

やがて学も静かに匙を動かし始め、緊張感に満ちていた室内の空気は、束の間だけ穏やかなものへと緩んでいく。

温かい料理で腹を満たし、少し息をついた彩は、下腹部に急激な圧迫感を覚えた。

食事を取ったことで身体が温まり、溜まっていた緊張が解けると同時に、強い尿意が押し寄せてきたのだ。

……いや、それだけではない。下腹部の奥深く、胃の下あたりが、どこかくすぐったいような重苦しい熱を孕んで脈打っている気がする。

「あの……すみません。お手洗いを借りてもいいですか？」

照れくささを残したまま給仕長へ尋ねると、男は恭しく「こちらでございます」と礼を執り、部屋の奥にある重厚な木製の扉へと身を引いた。

「俺も行く」

すかさず学が立ち上がった。見知らぬ異世界で、彩を一人にする気は毛頭ないらしい。給仕長は「どうぞお二人で」と柔らかく微笑み、若い侍従に二人を案内するようと言づけた。

扉の向こうに広がっていたのは、日本の高級デパートのラグジュアリーな化粧室を思わせる、洗練された身だしなみ用の前室だった。

姿見の大鏡や装飾の施された洗面台が並び、ほのかに甘い香油の匂いが漂っている。ただ、この豪華なスペースに対して、奥にある重々しい扉、個室自体は一つしかないようだった。貴賓室専用の贅沢なつくりゆえだろう。

学は個室の扉と周囲の様子を見分けると、不安げな彩の顔を覗き込んだ。

「……何か妙な仕掛けがあるかもしれない。俺が先に中を確認してこようか？」

見知らぬ異世界で彩を不安にさせまいとする、学らしい保護者的な警戒心からの申し出だった。だが、彩は少し首を振って微笑んだ。

「ううん、大丈夫だよ。行ってくるね」

「そうか。……何かあったらすぐ呼べよ」

学に前室で待ってもらうことにし、彩は個室の扉を開けて足を踏み入れた。

中は清潔で、中央には白い陶器でできた便器が据え付けられている。形としては日本の洋式トイレによく似ていたが、タンクもレバーも、ましてやウォシュレットのようなボタン類も一切見当たらなかった。

（どうやって使うんだろ……？）

用を足す前に構造が分からず困惑した彩は、前室の入口付近に控えていた侍従へ、少し扉を開けて恐る恐る声をかけた。

「あの……これって、どうやって流せばいいんですか？」

「失礼いたしました。説明が不足しておりましたね」

侍従は嫌な顔一つせず恭しくおじぎをすると、便器の脇の壁に嵌め込まれた青い魔石のプレートを指し示した。

「こちらは『魔術水洗式』となっております。用を足されたあと、そちらの魔石に手をかざしていただければ、自動で純化された水が流れ出し、洗浄から浄化まで執り行う仕組みにございます」

「へえ……魔石で流すんだ」

魔法が存在する異世界ならではの仕組みに感心しつつ、彩は「ありがとうございます」と礼を言って扉を閉めた。

カチャリと鍵をかけ、静まり返った個室で一人になる。

これで使い方は分かった。そう思いながらズボンのベルトを外し、下着ごとズボンを降ろしたその瞬間、彩の思考が止まった。

「えっ……！？」

あまりの衝撃に、思ったよりも大きな悲鳴が喉から漏れてしまっていた。

「彩！？どうした！」

即座に扉の外から、学の切迫した声と同時に重い足音が駆け寄ってくる。

気配からして、侍従を押し退けるようにして扉のすぐ手前まで迫ったらしい。

バン、と扉を叩くような勢いに、彩は跳ね上がるように我に返った。

驚きと困惑があまりに大きすぎて、すっかり尿意など吹き飛んでしまっていた。

彩は震える手で慌てて下着とズボンを引き上げると、鍵を外してゆっくりと扉を開けた。

「おい、無事か！何があった！？」

血相を変えて覗き込んできた学の眼光に、彩は胸の奥がぎゅっと縮こまるのを感じた。すぐ後ろには侍従も心配そうに控えている。

あまりに突飛で、あまりに恥ずかしく、どこから説明していいのかすら分らない。

「あの……な、なくて……」

「何がだ？怪我でもしたのか？」

「そうじゃなくて……あ、あそこが……っ」

彩は顔を真っ赤に染め、すがるような目で学を見上げながら、もじもじと股をすり寄せて小さく体を縮こまらせた。

消え入るような声でごによごによと口ごもる彩の様子に、学はただならぬ異変を感じ取りつつも、眉をひそめて首をかしげる。

「あそこ……？何を言ってるんだ」

「だから……！男の人の、ついてるはずのものが……なくなって……！」

半泣きになりながら絞り出した彩の言葉に、学は「男のついてるもの……」と低く反芻した。

思考を巡らせ、それが具体的に何を意味しているのかに思い至った瞬間、学は怪訝そうに眉を強くひそめた。

「そんなこと……あり得るのか？」

常識で考えれば、天地がひっくり返ってもあり得ない戯言だ。

だが、彩がこんな場面でつまらない嘘や冗談を言うような人間ではないことを、学は誰よりも知っている。

それに、ここは自分たちの知る常識が一切通用しない、魔法や神聖術が存在する異世界なのだ。

あり得ない。けれど、彩の言葉をただの勘違いだと一蹴することもない。

困惑と困惑が重なり合い、二人の間に重く微妙な空気が流れた。

しかし、その傍らで二人のやり取りを聞いていた侍従の反応は、まったく異なるものだった。

先ほどまでの何ごとかという固い緊張感がどこへやら、侍従は目に見えて安堵したように、胸を撫でおろしてふうと静かに息を吐いたのだ。

学はその侍従のわずかな態度の変化を見逃さなかった。

一瞬にして冷たい視線を侍従に向け、低く抑えた声で問い詰める。

「……何故そんなに冷静なんだ？」

鋭い眼光に射抜かれ、侍従は己の軽率な態度を学に咎められたのだと察したらしい。

顔をサッと青くさせると、恐縮したように身をすくめ、恐る恐る口を開いた。

「も、申し訳ございません！決して不敬を働くつもりでは……！ただ、何か重大な事故でも起きられたのかと焦ってしまったものですから……」

「事故じゃないなら、何だと言うんだ」

学の追及に、侍従は「なぜそんな当たり前のことを聞くのだろう」と言いたげに、戸惑いの混ざった表情で首をかしげた。

「そ、それは……お二方は異世界よりお越しになられた聖子様でございます故に、それは当然のことでございます。神聖なる儀式を経て降臨された聖子様は、元々そのように特別な……お身体も併せ持たれたお姿でおわすのが理でございますので……」

おどおどと、けれど侍従にとっては疑問の挟みようもない世界の常識、だからこそ何の悪意もなく口にされたその言葉に、彩と学は言葉を失うほどの衝撃を受けた。

彩の身体の変貌は、決して事故や異常事態などではない。

『神聖魔法』という神の権能を用いて異世界から召喚された際、女神の意思、この世界の理によって、聖子たる肉体があるべき姿へと書き換えられた結果だ。

「……ッ」

その言葉の意味を反芻した瞬間、学の顔から一気に血の気が引いた。

いつもの冷静な観察眼も余裕も一瞬で吹き飛び、顔を青ざめさせた学は、弾かれたように彩を押し退けてトイレの個室へ駆け込んだ。

カチャリと乱暴に鍵がかけられ、直後、ガタンッ、と個室の中から何かを激しく叩きつけたような重い音が響き渡る。

「学……！？大丈夫……！？」

ただならぬ様子に、自分自身のパニックも忘れて彩が思わず扉に歩み寄り、不安げに声をかける。

しばしの静寂のあと、扉の向こうから聞こえてきたのは、絞り出すように途切れ途切れな、けれど激しく震えた学の声だった。

「……だい、じょうぶだ……ッ」

強がるその声はかすかに上ずり、隠しきれない動揺に満ちていた。

聖子様と呼ばれた意味。自分だけではなく、自分を守ろうとしてくれていた学の身体にまで同じ異変が起きているのだと悟り、彩は絶望に眩暈を覚えるのだった。



神殿の最深部、限られた者しか足を踏み入れることを許されない極秘会議室。

重厚な黒檀の円卓を囲むように、壁面には青い魔導燭台が静かに揺らめき、ステンドグラス越しに落ちる宵の光が、室内に集う者たちの影を長く引き伸ばしていた。

集まっているのは、教皇シルヴェル率いる神殿の幹部と、この禁術を極秘裏に推し進めた第二王子アルフレッド、そして彼に忠誠を誓うごく一握りの側近たちのみだ。

「過去の古文書を紐解いても、聖様が一度に二人も降臨された例など皆無にございます！まさに我らが企てに、神の至福が降った快挙！」

第二王子派の文官が、声を潜めつつも歓喜に満ちた報告を口にすると、アルフレッドの側近たちが満足げに頷き合う。

「しかも、あの容姿だ」

円卓の上座に深く腰掛けた第二王子アルフレッドが、不敵な笑みを深めた。

「二人とも文献通りの黒曜の瞳に、異なる質感を持つ漆黒の髪。一方はしっとりと柔らかで庇護欲をそそる愛くるしい姿、もう一方は濡羽のごとく光を弾く冷ややかで端正な顔立ち……甲乙つけがたい至宝ではないか。神殿の尽力には大いに報いよう。二人ともこのまま『余』の配下として保護し、手厚く愛でてやるとしよう」

あからさまに二人を自分の所有物として手中に収めようとするアルフレッドの言葉に、側近たちが一斉に同調の声を上げる。

しかし、その歓声を断ち切るように、冷ややかな一言が落ちた。

「少々言葉が過ぎるようですね。王子殿下」

静寂が戻った室内。

儀式の要を務め上げた教皇シルヴェル・エストラドが、薄灰色の髪を揺らし、慈愛に満ちた、それでいて底知れぬ笑みをたたえて佇んでいた。

「なに……？何の不服がある」

眉をひそめたアルフレッドに、シルヴェルは董色の瞳を向けた。

「お戯れを。今回の召喚は、他の王子方や大貴族どもには一切伏せた極秘の儀式。二人もの聖子様をまとめて王宮へ連れ出してみなさい。嫌でも他派閥の嗅覚に引っかかり、余計な内紛と情報の漏洩を招くだけにございます。何より、二人の聖子様が同じ場所に君臨するなど、権威の二分化を生み、無用な混乱を招くだけでしょう」

シルヴェルは一步步み寄り、胸の前で静かに手を組んだ。

「聖子様は神聖なる賜物であり、王家の私物ではございません。そのお身に宿る力を正しく導き、身も心も清めてお世話することこそ神殿の使命。……当然、お一人は神殿の深奥でお迎えし、聖なる僕として手厚くお育ていたします」

「戯言を！あの二人は降臨の瞬間から互いを強く求めておった！異世界から来た二人を無理に引き裂くなど、許されると思うか！」

アルフレッドが身を乗り出し、尊大な声を張り上げる。

建前は二人を思いやるようないいぐさだが、その瞳に宿るのは、至宝を二人とも独占したいという露骨な欲望だった。

だが、シルヴェルは微動だにせず、うっとりとした口調で言葉を重ねた。

「おや……引き裂くのがお忍びないとおっしゃるのなら、お二人まとめて神殿の深奥にてお預かりいたしましょうか？神に選ばれし尊きお身を清め、その神聖なるお力を正しく咲かせるための庇護と奉仕にかけては、我が神殿こそが最も相応しき場にございますれば」

「なっ……！」

微塵の隙もない、完璧な聖職者としての微笑み。

だが、その慈愛に満ちた言葉の裏には、「ならば二人とも神殿で囲い込み、神権の象徴として己の足元に置くが？」という脅迫と野心が潜んでいた。

シルヴェルという男は、単なる高德な聖職者などではない。

せいだくあわ

清濁 併せ呑む信仰の頂点に君臨し、数々の政治闘争を勝ち抜いてきた百戦錬磨のやり手なのだ。

神殿側の若き司祭たちは、やはり教皇様は聖子様を王家の欲望からお守りくださる慈悲深きお方だと信じきった情熱的な眼差しをシルヴェルへ注いでいる。

対して、アルフレッドやその側近たちは、この狸爺め、秘密保持と神聖さを盾に至宝を丸ごと横取りする気かと、腹の底で舌を打ちながら鋭い視線を浴びせていた。

表面上は、秘密裏に行われた儀式の後始末と、聖子の処遇を巡る格調高い議論。

しかし、その腹の底で渦巻いているのは、降臨したふたつの尊い存在をどちらが手に入れ、己の欲望と権威の象徴として支配するかという、醜い争いだった。

青い魔導の火が揺れる中、第二王子と教皇の視線が、静かに、そしてバチバチと火花を散らしていた。



昨夜の夕食が多すぎたことから、二人は給仕に「朝食は少なくしてほしい」と要望を出していた。

運ばれてきたのは、瑞々しいサラダに焼きたてのパン、新鮮なフルーツに香ばしく焼き上げられた腸詰め、そして黄色が鮮やかなオムレツ。

日本のホテルの朝食とさほど変わらない整ったラインナップに、彩は胸を撫でおろし、少しだけ緊張を緩めた。

もっとも、二人の目元には疲れが色濃く刻まれている。

自分の身体に起きた信じがたい変貌に動揺し、いつ何が起きるか分からない緊張感から、結局一睡もできぬまま朝を迎えていたのだった。

食事が終わるとすぐに、二人は昨日とは別の応接室へと案内された。

待っていたのは、第二王子アルフレッドと、教皇シルヴェルだ。

「やあ、昨夜はよく眠れたかな？我が国が誇る最高級の寝具の寝心地はどうだった？」

革張りのソファに深く腰掛けたアルフレッドが、上機嫌な笑みを浮かべて声をかけてくる。その尊大な親しさに、学は微塵も表情を変えず、冷ややかな視線を向けたまま短く応じた。

「……配慮には感謝します。ですが、本題に入っていただきたい」

あからさまな塩対応にもアルフレッドは取り合わず、面白がるように鼻で笑った。

「相変わらず可愛げのない奴だ。……まあいい。昨夜、自らの身体の『異変』には気づいたのだろうか？」

その言葉に、彩の肩が大きく跳ねた。学も切れ長の目をさらに鋭く細める。

「侍従から何か聞いたかもしれんが、お前たちのその身体は異常ではない。神聖なる儀式を経て降臨した聖子に与えられる、この世界の理なのだ」

学は拳を固く握りしめ、低く抑えた声で切り返した。

「……元の身体に治す方法はあるのか。治せるなら、今すぐ元に戻せ」

切実な問いに対し、教皇シルヴェルは首を振った。

「学様、それは病でも呪いでもなく、繁栄を司る女神様のご意思……聖子様にごえられし至高の祝福でございます。人のか弱き術などで、神の理を覆すことなどできましようか」

「祝福だと……？訳の分からないことを言うな」

学の殺気立った声にも、シルヴェルは顔色一つ変えずに言葉を重ねた。

「ええ、祝福です。……聖子たるお二人の役割は、繁栄を司る女神様のお導きに従い、我が国に恒久なる安寧と実りをもたらすこと。そのために、神聖なるある儀式を執り行い、尊き奉仕を果たしていただく必要がございます」

「……儀式だと？一体何をさせるつもりだ」

学が追及するも、シルヴェルはただうっとりと目を細めるばかりだった。

「ご安心召されよ。聖子様のお体と心を女神様へ捧げ、その神聖なる力を満たしていただくための……誠に誇り高き、聖なる儀式に過ぎません。お二人の存在そのものが、我が国の繁栄の鍵なのですから」

抽象的で、けれど拒絶を許さない大義名分。

「……っ！ふざけるな……！！」

学の顔から一気に血の気が引き、激越な感情とともに怒号が響き渡った。

怒りで全身を激しく震わせ、今にもアルフレッドたちへ掴みかからんばかりの勢いを見せる。

「そんな得体の知れないこと、誰が受け入れるか！俺たちを何だと思っている！！」

（学っ、落ち着いて……！）

彩の喉元まで制止の言葉が出なかった。だが、声にはならなかった。

見知らぬ異世界に理不尽に連れて来られ、自分たちの身体を勝手に作り替えられ、得体の知れない儀式や奉仕を強いられようとしているのだ。学が激怒するのも当然だった。

そして何より、彩自身もこれから自分たちに何が起きるのかという底知れぬ恐ろしさに、全身の震えを止めることができずにいた。

怒りに肩を上下させる学の横で、彩はぎゅっと拳を握りしめた。恐怖で奥歯がガチガチと鳴りそうになるのを必死に堪え、か細く、けれどハッキリとした声で大人たちを見つめ返した。

「……僕たちが、どれだけ拒んでも……ですか？」

彩の突然の声に、部屋の空気が微かに揺れた。

「あなた方の言葉が本当なら……僕たちはこの国にとって、ものすごく尊くて、貴重な存在なんですよ……？ だったら……そんな僕たちの意思を無視して、傷つけたり、……怖い目に合わせたりしないと……信仰する女神様に誓って、約束できますか？」

震える声で紡がれた彩の問いかけ。

その言葉の奥底には、身体が変質させられた以上、乱暴されたり慰みものにされたりするのではないかという、恐怖が張り詰めていた。

学もまた、彩を庇うように一歩前へ出ると、大人たちを射抜いた。

「答えろ。……そもそも、なぜ俺たちの身体が変えられた？この世界には、俺たちのような……男と女の双方の性質を持った人間が、当たり前が存在するのか？」

自分たちは多くの人間にとって都合のいい性愛の対象として狙われるのではないか学の剥き出しの警戒と追及に、アルフレッドは可笑しそうに鼻で笑い、シルヴェルは慈愛に満ちた首を振った。

「ご安心召されよ。我が国にも当然、数多くの女性がおり、男と女が夫婦となって子を成しております。また、高貴な男同士が愛を睦まじむこともごく自然な嗜み。……ですが、お二人のように神聖なる力を宿し、両方の美しさを備えられたお姿は、この広い世界のどこを探しても存在いたしません」

そう言って、シルヴェルは胸に手を当てて微笑んだ。

「数十世紀に一度、女神が我が国に賜る……世界にたったお二人だけの、奇跡の聖子様にございます。そのような至高の存在を、手籠めにしたり傷つけたりするなど……神に仕える身として、決して許されることではございません。それどころか、この国の者であれば誰一人として、お二人に不敬を働くことなど思い立ちもしないのです」

そう諭され、二人の張り詰めていた警戒の糸が、ほんの少し揺らぐ。

アルフレッドもまた、そこへ諭すよう言葉を被せる。

「理解できたか？お前たちは決して不当に扱われる存在などではない。むしろ我が国の至宝であり、神の愛し子なのだ。……私も教皇殿も、お前たちが望まぬことを力づくで強いるつもりは一切ない。そこはどうか信じてほしい」

堂々とした第二王子の誓いと、高潔な教皇の言葉。

だが、学はそれで納得するほど甘くはなかった。

鋭い視線を教皇へと向け、さらに畳みかける。

「……なら、具体的にその儀式とやらで俺たちに何をさせる気だ？身体に影響や後遺症はないんだろうな」

その切実な追及にも、シルヴェルは顔色一つ変えず、頷いた。

「ええ、もちろんにございます。儀式と言いましても、お二人に過酷な労働や苦痛を強いるようなものではございません。

神殿の最奥にある祭壇にて、女神様へ祈りを捧げ、お身体に秘められた神聖な力を開花していただく……ただそれだけにございます。お身体に傷が残ることも、害が及ぶことも万に一つもございません。むしろ女神様の加護を受け、より健やかにお過ごしになれるでしょう」

「……ただ、祈りを捧げて力を開放するだけ、だと……？」

「左様にございます。お二人のお存在そのものが奇跡であり、ただそこに在り、祈りを捧げていただくことこそが、我が国に実りをもたらす奉仕なのです」

あまりに滑らかで、一切の淀みのない説明に、学の迫及の手も一瞬行き場を失う。

（言葉通りに受け取っていいはずがない……。でも、本当に僕たちが思っているような恐ろしいことではないのかもしれない……）

「……それに」

シルヴェルが、心底申し訳なさそうに、傷痛な面持ちで言葉を重ねた。

「我々の都合でお二人のような尊き方を異世界からお呼び立てし、このようなご負担をおかけしてしまったこと……誠に言葉もございません。我が国が尽くせる限りの償いとして、お二人がこの世界で少しでも快適に、何不自由なく過ごせる環境をお約束いたします」

アルフレッドも深く頷き、力強い声で応じる。

「そうだ。お前たちが望むものなら、地位であれ、贅を尽くした生活であれ、何でも叶えてみせよう。……そのためにも、まずは無事に儀式を執り行い、この国に祝福をもたらしてほしいのだ。儀式さえ終われば、お前たちの自由も保障する」

「自由……ですか？」

彩の心が、わずかに揺れた。

身勝手に連れてこられた怒りは消えない。

だが、頼るあてもない見知らぬ異世界で、これほど手厚い補償と尊重を約束されたのだ。

大人たちの言葉に、毒など含まれていないように思えてしまう。

シルヴェルは慈愛に満ちた笑みを浮かべたまま、本題を切り出した。

「ただし、その尊きお力を正しく儀式で発揮していただくためには、事前の準備が必要となります。お二人の内に宿る『聖導力』……すなわち、この世界を救い、奇跡をもたらすための神聖な魔力を正しく馴染ませるための大切な調律にございます」

「……準備？聖導力だと？」

学が即座に眉をひそめる。シルヴェルは慈愛に満ちた笑みを崩さず、静かに頷いた。

「ええ。聖導力とは極めて繊細な力。召喚の負荷によって不安定になったお身体を整え、その波長をこの世界の理に適合させねば、お二人ご自身の身を苛む毒ともなりかねません。……ましてやお二人とでは、宿しておられる聖導力の属性も質も全く異なります。彩様は浄化と安らぎを司る柔らかな光、学様はより力強く国を導く濃密な導力……。ゆえに、それぞれに適した

せいひつ

環境で調整を行わねばならないのです。彩様は神殿の静謐な聖水にてお身を清めていただき、学様は王宮の特別な施設にてお身体を馴染ませていただきます」

「待て！別々にやるというのか！？」

学が鋭い声を張り上げるが、アルフレッドがそれを宥めるように恭しく手をかざした。

「ほんの数日、儀式までの準備期間だけだ。お前たちの安全と身体のためなのだから、無茶を言わないでくれ。学、お前も彩の身体が心配だろう？ 適合に失敗して彼の身に何かあってからでは遅いのだぞ」

「くっ……」

彩の身を案じているからこそ、そして身体への危険を示唆されたからこそ、学もそれ以上強く拒絶することができずにいた。

「……分かりました」

「……彩」

学が彩の方へ向かって焦燥の滲む手を伸ばす。

だがそれと同時に、アルフレッドが学の肩を抱き寄せた。

「っ……！」

学の肩がびくりと過剰に跳ね上がる。学はギロリとアルフレッドを睨みつけたが、アルフレッドはどこ吹く風といった様子で、困ったように肩をすくめてみせた。

「そう邪見にしてくれるな。お前にも王宮で準備を進めてもらわねば困るからな。それに……準備期間中だからと言って、

お前たちを始終縛り付けるつもりはない。安全のために護衛こそ付くが、王宮の大図書館を自由に利用できるよう手配してある。準備以外の時間は、どの本を読んでも構わない」

そう言って口元を緩めるアルフレッドの言葉に、学の目つきが一瞬で変わった。

(……学)

彩は学の横顔を見つめ、彼が提示された条件に強く心を動かされたのを察した。

学は昔から本を読むのが好きだった。

そして何より、見知らぬ異世界に放り出された今、元の世界へ戻る手立てを探すためにも、この世界で二人で生き抜く術を知るためにも、確かな情報源は何よりも欲されるものだ。

「……王宮の知識は、いずれ二人で生きていく上でも必要になるだろう？ 悪い話ではないはずだ」

アルフレッドの畳みかけるような追撃に、学の喉がゴクリと鳴る。

学がこの条件を呑もうとしているのは、決して自分の欲のためではない。

二人でこの異世界を生き延び、彩を守り抜くための力を得るためなのだと、彩には痛いほどよく分かっていた。

「……分かりました。俺は、王宮に行きます」

学の口から絞り出された承諾の言葉。

それを受け、静かに微笑むシルヴェルと、満足げに学の肩を叩くアルフレッド。

両者を納得させるための材料は、すべて出揃ってしまった。

「では彩様、こちらへ」

「彩！……絶対に無理はするなよ！」

「学も……っ！」

離れていく学の手を、伸ばされた指先を、彩は最後まで見つめ続けることしかできなかった。

こうして二人は、互いを想い合い、互いの未来を守るために自ら別々の道を選び

王家と神殿という、二つの檻へと引き裂かれていったのだった。

【続きは製品版をお楽しみください】